

# NETWORK NEWS



2014, 12, 26

40

ネットワークニュース「願いから動きへ」は真宗大谷派のハンセン病問題への取り組みを紹介する広報誌です。

## ハンセン懇委員紹介

「真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会」(通称：ハンセン懇) 委員紹介

2014年度に入り「ハンセン懇」委員メンバーも交代し、新たな歩みを始めました。皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。あたらしくメンバーになった方には\*印を付けています。

### 【連絡会】

**第1連絡会** (ハンセン懇委員) 水澤孝秀、酒井智\*、本間義敦\*、磯崎信光\*

(担当) 阪本、二宮

**第2連絡会** (ハンセン懇委員) 見義智証、朝比奈高昭、旦保立子、酒井義一、高橋深恵、堀前裕見、青井和成、松下春樹、松寺広深

(担当) 吉田佑樹、二宮

**第3連絡会** (ハンセン懇委員) 佐々木賢成、旭野康裕、稲葉亮道、大島文昭\*、土屋慶史、下間寿昭、鈴木勘吾

(担当) 吉田佑樹、近藤

**第4連絡会** (ハンセン懇委員) 勝間靖、新康紀\*、飯貝宗淳\*、佐々本尚\*、新田專信、谷大輔、稲垣洋信\*、小松裕子、中杉隆法、岡学

(担当) 山内、蓑輪

**第5連絡会** (ハンセン懇委員) 清原昌也、来山哲治\*、田中一成\*、福田了樹\*、福田恵信、寺本是真\*

(担当) 阪本、大屋

**第6連絡会** (ハンセン懇委員) 長谷暢、知花昌一\*、具志堅優己、菱木政晴

(担当) 雨森、近藤

### 【作業部会】

**交流集会部会** (ハンセン懇委員) 中杉隆法、旭野康裕、吹原竜二、鈴木勘吾、藤井満紀

(担当) 山内、吉田佑樹、大屋、蓑輪、二宮

**真相究明、家族・ふるさと部会** (ハンセン懇委員) 長谷暢、佐々本尚、下間寿昭、訓覇浩、菱木政晴

(担当) 雨森、吉田佑樹、大屋、蓑輪、吉田和豊、近藤広報部会 (ハンセン懇委員) 谷大輔、本間義敦、旦保立子、高橋深恵、飯貝宗淳

(担当) 山内、大屋、蓑輪、二宮、近藤

ハンセン病問題に関するお問い合わせなど、ごなたでもお気軽にお電話ください。

また、各療養所・退所者の会の窓口担当も、紹介しております。

連絡先：☎075-371-9247

(真宗大谷派解放運動推進本部内)

## 重監房資料館訪問に寄せて

2014年4月30日に栗生楽泉園(群馬県草津町)内に重監房資料館がオープンしました。そのことは地元メディアが大きく取り上げました。その時、私の脳裏には忘れられない方々の顔が浮かびました。12年ほど前のある日、突然に(ひだまり)二さんが支援者と共に自坊に訪ねて来られました。訪問の目的は重監房(特別病室)復元に向けて署名をとりまとめて欲しいとの依頼でした。当時、ハンセン懇内でも重監房の復元について盛んな議論がされていました。私は現状のまま保存したほうがいいと考えていましたが、(ひだまり)さんの復元へのあつい思いにふれ、署名の取りまとめを約束し、後日署名を託しました。



重監房資料館

その(ひだまり)さんは重監房資料館のオープン直後の5月11日に旅立たれました。あたかも草津町では二回目になるハンセン病市民学会の開催中であり、(ひだまり)さんは自らが提唱し命をかけて取り組んできた重監房資料館の完成を見届けるかのようにその生涯を閉じました。私が資料館を訪れたのは6月でしたが、平日にもかかわらず多く

## あとがき

今年も松丘保養園(青森県青森市)で白道会の報恩講が勤められた。10月4日の青森は暖かな日和だった。園内の納骨堂の前でお勤めをして、施設の多目的ホールで報恩講を勤めて交流会を行った。今年は園から11人の参加者があった。私が初めて参加してから数年経つが、園内からの参加者が年々減ってきている。交流会の時間自体も年々短くなっている。保養園内の高齢化が大きな課題ではあるが、課題はそれだけではない。参加したくても介護を必要とする入所者は、職員負担を考えると遠慮してしまうようだ。同じ病室の担当者が自分だけにつくと、他の同室の人に目が届かなくなってしまうのではないかと思うからだ。

交流会の後に一人の入所者の方にお茶に誘われた。「亡くなった人の荷物を整理していて、私の家はいれないから。」と、もう一人の入所者のお家にお邪魔してお茶になった。「みんな歳とってきたからね。」と言われた。松丘保養園の報恩講を通し、あらためて私たち自身と社会の課題を教えてもらった気がする。

(「ハンセン懇」広報部会 本間義敦)

真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会 ネットワークニュース



真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会  
ネットワークニュース「願いから動きへ」40号

発行日 ● 2014年12月26日

発行人 ● 木越 渉

発行 ● 真宗大谷派解放運動推進本部

〒600-8505

京都市下京区烏丸通七条上る

真宗大谷派宗務所

TEL: 075・371・9247

FAX: 075・371・9224

E-mail:

kaiho@higashihonganji.or.jp



重監房跡地  
(1999年、宗議会議員の現地研修より)

の来館者があり驚きました。資料館は納骨堂に隣接しており想像以上に立派な建物です。入り口で簡単なアンケートを記入した後、学芸員の案内で重監房についてオリエンテーションの為に20分ほどの映像を観るようになっていきます。その後、復元された重監房の前で映像によるレクチャーがあり、いよいよ重監房へと進んでいきます。実際の重監房を知る方の証言を元に復元しただけにリアリティがあります。そこを出た後はパネル展示や重監房跡地の発掘調査から出土した遺物の展示などを見学するようになっていきます。1時間半ほどで館を出て感じたことは、ぜひ重監房の跡地も併せて観て欲しいということです。

かつて、重監房の跡地に立って拡声器を肩にかけ、そこで何が行われたのかを語ってくれた田中梅吉さんの姿が思い起こされます。梅吉さんは病の身をおして園内を案内してくれました。この重監房資料館は(ひだまり)さんをはじめ、この地で亡くなっていかれた方々にとつての忘れ形見ではないでしょうか。国による強制隔離政策のすさまじさの象徴である重監房の存在を、しっかりと胸に刻み、語り継ぐことがあらためて求められているのだと思います。

「ハンセン懇」第2連絡会委員 朝比奈高昭



# 「一人ひとりの「願い」と「想い」に込めるために」

## 統一交渉団と厚生労働省で

## 合意書が交わされました――

この10月、長島愛生園（岡山県瀬戸内市）で宇佐美治さん、金泰九<sup>キムテグ</sup>さん、加藤由男さんの米寿を祝う会がおこなわれました。3人とも西日本訴訟・瀬戸内訴訟（ともに、ハンセン病違憲国家賠償請求訴訟）原告団の中心を担ってきた方たちです。親交の厚い知人と弁護士団の有志10数名ほどの、ささやかな小宴でしたが、中尾伸治 自治会長、日野夫妻、溝渕さんも参加され、食事とお酒を囲んで、時には山陽放送の宮崎さんが特別に編集してくれた映像や裁判の苦労話で盛り上がり、久々にまったりとした楽しい時間を過ごしました。

また、今回は、園から集会所をお借りし、介護職員の皆さんに会場設営や送迎と全面的な協力をいただきました。それぞれの居室で、お手製の料理に舌鼓をうち、「今日は特別だよ」と言ってお出してくれた酒を酌み交わし談笑していた裁判の頃とは随分勝手が違ったのも事実です。この日の準備のために、日野夫妻は、園や職員さんたちにお願いと挨拶に回られたそうで、ささやかな小宴を設けるにも、多くの職員さん達のご協力やご理解を必要とする療養所の状況に、やや戸惑いを覚えたのも事実でした。

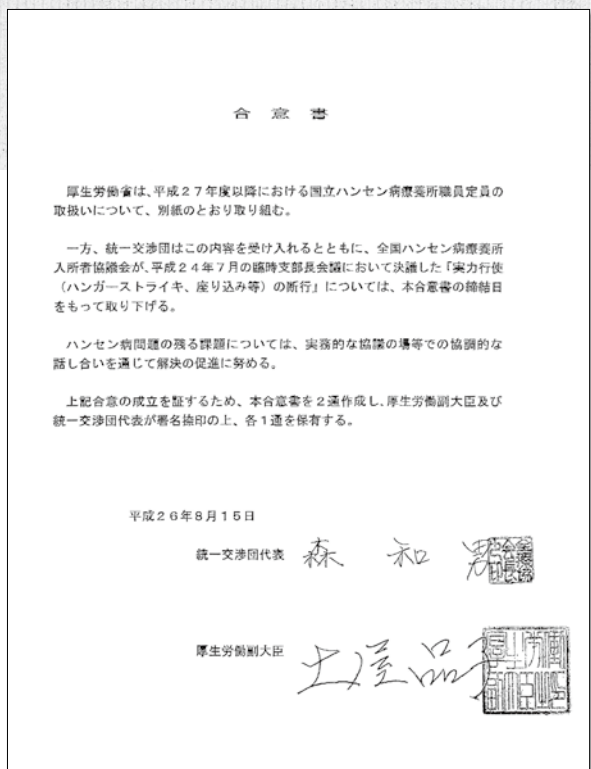
③ 2019年度以降は定員の絶対数を減少させるが、入所者一人当たりの定員数1・5人の水準を下回らないよう維持する

と約束しました。

統一交渉団はこの厚労省の定員計画を受け入れるとともに、全療協の「実力行使（ハンガーストライキ、座り込み等）の断行」決議を取り下げることを約束したのが、8月15日の合意です。

これは政府の定員合理化計画から療養所を実質的に除外したもので、故神美知宏全療協会長、故<sup>こたけ</sup>研雄二全原協会長を先頭に、自らの命を賭すこともいとわれない闘いを続けてきた入所者の皆さんの切実な想いがようやく結実したといえます。

小さな幸福を感じるためには、多くの園の方々の協力と配慮を必要とする療養所の現状を、先の「米寿のお祝い」で経験した私



厚労省との合意書

は、全療協が命がけで定員削減を阻止し、介護職員数の増加を求めた意味と重要性をいまましながらに実感しました。それとともに、その「数」を「質」に転化させ、在園の方々一人一

人で、2014年8月15日、統一交渉団（代表 森和男全療協会長）と厚生労働省（代表 土屋晶子厚労副大臣）との間で、国立ハンセン病療養所職員定員に関する画期的な合意が交わされました。

まず、国の2015年度から2019年度までの公務員定員合理化計画（2014年7月25日閣議決定）の中にあつて、内閣人事局長は厚労省に対し、国立ハンセン病療養所に関しては、その歴史的経緯やハンセン病問題解決促進法の趣旨、更には高齢化に伴う入所者の実情に応じた充実した療養体制の確保の必要性から、合理化目標数を大幅に軽減し、また2019年度以降も入所者一人当たりの定員の水準を維持するとの通知を出しました。

- ① この内閣人事局長通知を受けた厚労省は、2015年度から2019年度の合理化目標数を2010年度から2014年度までの合理化数（△259人）の2分の1を下回る数（△129人）に軽減する
- ② 2015年度から2018年度までの定員を対前年度＋1人ずつとし、2018年度までに入所者1人当たりの介護員・看護師数を1・5倍程度拡充する

人が「尊厳ある個人」として尊重され、「自分らしい姿」で暮らし、最期を迎えることのできる療養所づくりをしていくことが、次なるステップであることも痛感しました。

2001年の熊本地裁判決は「全ての人には発展可能性があり、隔離はこれを奪うものである」と絶対隔離政策を断罪し、ハンセン病回復者の人間回復を宣言しました。たとえ高齢となっても発展可能性を有する人間であることには変わりありません。在園の方たちの「こう生きたい」「こう在りたい」という「願い」「想い」を少しでも実現しようとするのが、個人の尊厳の尊重であり、自己決定権の具体化なのです。これが施設側の視点のみからなる「安全」や「効率化」でつぶされることがあってはなりません。

そのためには、入所者一人一人の「願い」「想い」に即した医療・看護・介護を実現するチーム体制（エンド・オブ・ライフ・ケア）の構築や、在園の方々の尊厳や思いを守るための調査・提言機関（人権擁護委員会等）の設置を実現することが、これからの重要課題です。また、療養所で働く医師・看護師・介護員にとっても魅力のある職場となり、そして多くの人々が交流し、人権を学ぶことができる場としての療養所を目指す将来構想の実現も不可欠です。

去る11月19日、ハンセン病問題解決促進法の一部改正（退所者遺族支援制度）に伴い、参議院厚生労働委員会は「職員の確保に最大限努めること。」との附帯決議を行いました。

私たちも、在園者の「尊厳」のために、質・量ともに備えた療養所体制の充実に向け、さらなる一步を踏み出していかなければならないのだと思います。

ハンセン病違憲国家賠償請求訴訟弁護士 神谷誠人



# ハンセン病療養所の将来を見据えて

—国立ハンセン病療養所における「エンド・オブ・ライフ・ケア」チーム  
および人権擁護委員会の設置について—

全国のハンセン病療養所では入所者の高齢化が進む中、生活を支えるあらたな仕組みを整えることが急務となっています。今号から3回にわたって、邑久光明園副園長 青木美憲さんに、今後、療養所で必要だと考えられる取り組みについて解説していただきます。

はじめに  
わが国の国立ハンセン病療養所入所者は高齢化により減少の一途を辿る一方である。私の属する邑久光明園では今後10年間で入所者数は2割に減少すると予測されており、長い歴史のある療養所がまさに激変の時期を迎えていると言っても過言ではないだろう。その中で今起きていることは何か。その一つは入所者の自治能力の著しい低下である。

療養所には、家族と切り離された入所者に対して家族の代理として本人の意思を代弁する「世話人」（療養所によつては「後見人」と呼ばれる）や、入所者の意思を代表し療養所や国へ働きかけを行う「自治会」が古くから存在し、こうした自治活動により入所者の人権が守られ、回復されてきたことは歴史が示すとおりである。しかし、入所者の高齢化、人数の減少が進む中で、自治会制度、世話人制度の維持が次第に困難となりつつある現状を考えると、今後も入所者の人権を守り続けるためにはこれらの制度に替わる新たな制度を整えることが不可欠と考えられる。

ハンセン病市民学会での2013年5月から2年間にわたる検討や光明園での取り組みの経験から、入所者を取り巻く人権上のさまざまな課題、および一般医療機関の動向や知見を踏まえ、最後の時期を迎えつつある療養所が入所者の人権が守られる形で運営されるために必要と考えられるしく

みとして、2014年3月に「エンド・オブ・ライフ・ケア」チームおよび人権擁護委員会の設置案を全国ハンセン病療養所入所者協議会に提案するに至った。これから3回に分けて案を解説させて頂きたいと思う（この稿は全て2014年11月に記しました）。

「エンド・オブ・ライフ・ケア」チーム  
および人権擁護委員会について

①「エンド・オブ・ライフ・ケア」チーム  
エンド・オブ・ライフ・ケアとは、高齢化社会の到来と慢性疾患患者の増大に伴い終末期ケアのあり方が模索されている昨今、従来の「ターミナルケア」や「緩和ケア」と異なり、終末期医療のみならず、いつ来るだろう死を意識しながら、それまでの間、本人にとって最善の生を生きられるよう支援する考えであり、その取り組みはわが国において近年急速に普及しつつある。国立ハンセン病療養所においては2012年から沖縄愛楽園において先駆的に導入されている。

超高齢化が進行する国立ハンセン病療養所においては入所者全員がエンド・オブ・ライフ・ケアの対象と言ってもよい。残された時間を有意義で尊厳あるものにするためには、本人らしく生きられる意思決定を支援し、最後まで納得できる人生を過ごすためのケアを行うチーム体制を整備することが不可欠と考えられる。特に、家族の代

理としての役割を果たしてきた世話人制度が立ち行かなくなりつつある今日、その必要性は極めて大きいと考えられる。

②人権擁護委員会  
医療機関における倫理委員会は大きく2つのものがある。

一つは研究倫理委員会と呼ばれ、院内で臨床研究を実施する際の倫理審査を行う。もう一つは病院倫理委員会（もしくは臨床倫理委員会）と呼ばれ、医療現場で生じるさまざまな倫理的諸問題の検討を行う。わが国では研究倫理委員会は各病院で広く普及しており、一方の病院倫理委員会も普及しつつあるが、ハンセン病療養所においては光明園に設置されている「人権擁護委員会」以外にはその設置例を見ないようである。

しかし、ハンセン病療養所が医療施設と同時に人生の大半を過ごす生活施設であることや、入所者の人権を守る上で大きな役割を果たしてきた世話人制度や自治会制度の維持が困難となりつつある現状からすれば、一般の医療機関以上にその必要性は大きいことは明らかである。ここでは、ハンセン病療養所における病院倫理委員会を、入所者の人権を守るためのものであることを明確にする意味で、「人権擁護委員会」と呼ぶこととする。

（つづく）  
国立療養所邑久光明園副園長 青木美憲

## 外島保養院の歴史に動かされて

—外島保養院の歴史をのこす会 発足—

かつて大阪には公立のハンセン病療養所「外島保養院<sup>そとじま</sup>」がありました。1907年の「癩予防ニ関スル件」にもとづき、1909年、2府10県（大阪、京都、兵庫、奈良、和歌山、三重、滋賀、岐阜、福井、石川、富山、鳥取）の連合立療養所として、現在の大阪市西淀川区中島二丁目付近に開設されました。しかし、1934年9月21日、近畿一円を襲った室戸台風で施設は壊滅し、196名もの方が亡くなったのです。その後、大阪をはじめとする2府10県での再建を目指しましたが反対運動で実現せず、岡山県長島の地に「光明園」として移設されました。

現在は、神崎川沿いの保養院跡地付近に、邑久光明園入所者自治会によって記念碑が建てられ、毎年、室戸台風の犠牲になった方々の法要が行われています。しかし、時の流れとともに、大阪に療養所が存在したことも、また外島保養院に多くの患者の方々が送り込まれてきたことも忘れ去られようとしているのが現状です。

室戸台風から80年を迎えた2014年9月、保養院の歴史とそこに生きた人たちの姿と声を記録と記憶に刻むことを通して、ハンセン病問題の全面解決と再発防止に資するための取り組みを行おうと「外島保養院の歴史をのこす会」が立ち上がりました。

外島保養院の歴史に思いを馳せるとき、国による強制隔離政策を無批判に受け入れ、ハンセン病を患った方々や家族を自分たちの地域から排除してきた責任を私たち一人ひとりが自覚し、二度と偏見・差別による被害を起こさないでほしいという、呼びかけの声を感じずにはいられません。外島保養院の歴史に学ぶことは、私自身のこれまで、そしてこれからの歩みがどこまでも問われることであり、ハンセン病問題解決に取り組む姿勢と、責任の自覚、行動に対して厳しい眼差しが注がれることなのだと思います。

※「外島保養院の歴史をのこす会」では、今後、2府10県の行政に呼びかけ、当時の記録の整理や記憶をのこす取り組みを進めていきます。問合せは、☎06-7506-9424（ハンセン病回復者支援センター）まで。

解放運動推進本部 近藤恵美子



室戸台風で全壊した外島保養院



被害の大きさを伝える翌日の新聞  
(大阪毎日新聞 1934年9月22日)



外島保養院記念碑  
1996年の「らい予防法」廃止を期に建てられた





## 世のいのりにこころいれて

(親鸞聖人の言葉「御消息集」真宗聖典 568 頁)

世に満ちている「人間でありたい」「本当に生きたい」という人々のいのりを、ちゃんと聞きながら…

# 今、「聞き取り」をするということ

「今ならお話しできるかもしれないね」。聞き取り当日の朝、首都を直撃した暴風雨の様子を気にしながら、平野仁枝さんに聞き取りをお願いした時の言葉を噛みしめていた。82歳になられた仁枝さんが言われた「今なら」に、万感の思いが込められた「今」の重さを感じていた。平野さんご夫婦と知り合い、ハンセン懇委員として交流をしながらも、仁枝さんの経験をあえて私からは聞こうとしてこなかった。そんな私にとっては、やっとの「今」であり、今だからの「今」だった。

夫の昭さんは、自叙伝も書いておられたし、機会あるごとに積極的に語ってくださった。でもそれも聞いただけで終わっていた、と妻・仁枝さんの聞き取りをすることになって改めて気づかされた。ハンセン病によって余儀なくされた苦難の人生を聞く事は辛いことだ。しかし隔離・差別偏見に苦しめられた自らの体験を語ることは、聞く側の辛さとは比べられないだろう。なのにあえて語ってくださるのは、問題を無関心に放置したり、傍観して平気でいる私や社会の「<sup>もうみょう</sup>盲冥」を照らすためだ。また現在の回復者の人生の残された時間を考える時、隔離による苦難を語らずして自分の人生は完結しない、と考えておられる方も少なくないだろう。私たちは皆さんが生きてこられた証しをしていかねばならない。だからこそ聞き取っておかねばならない「今」を迎えている。

私たち委員が聞き取るということは、苦難の人生を聞いて驚いたり悲しんだりするだけで終わってはいけない。個々の体験から隔離の実態や差別偏見の被害に憤り、怒ることだ。その感情をエネルギーとして私の内にある問題や、時代社会が抱える課題を厳しく問い、それらを各々の現場で自分の表現で発信し、広く問い続けることだ。それは闘いであり、未来へとつながる願いでもある。聞き取ること、苦難の歴史を前に歩んでいかれた回復者の方たちと、未来に生きる人たちへの願いと責任を背負っていかねばならない最後の「今」でもあろう。

多磨全生園の居室居間で、録画録音を許してもらい2時間半ほどお話ししていただいた。生い立ちから早いご両親の死、駿河療養所への入所、社会復帰そして再入所。ご両親やご実家の苦労、出会い、結婚…。社会での苦労、女性としての辛い経験。内容はやはりとても厳しかったが、穏やかにはっきりと語られた。しかし聞けなかったこともたくさん残った。

終わって、外食しようということで園の外に出た。朝の暴風雨が嘘のように、台風一過の青空と美しい夕焼けが広がっていた。

「ハンセン懇」第3連絡会委員 旭野康裕



## 菊池事件 再審模擬裁判を受けて

2014年10月19日に菊池恵楓園（熊本合志市）において、菊池事件再審をすすめる会主催のもと、熊本大学学生有志の協力により再審模擬裁判が執り行われました。今回開かれた模擬裁判は、1962年4月に熊本地裁になされた第3次再審請求が認められ、現代において再審がはじめられたという設定で、被告人であるF氏が生きていると仮定し、裁判員裁判の形式による模擬裁判となりました。

今回の裁判では、凶器や証言に関する正当性と、憲法違反ということが争点となりました。裁判官の判決は、凶器や証言に関する不自然な点から証拠ねつ造の疑いは払拭できないとし、また、すでにハンセン病に対する特効薬ができていたにもかかわらず、合理的理由のない差別的な扱いをされていたと認められ、この影響は刑事手続き全般に及んでいると考えられるとして憲法14条（法の下平等）違反にあたるとされ、これらのことから、被告人に無罪の判決が言い渡されました。

今回の裁判はあくまで模擬裁判であるが、人の命の尊さ、平等ということの意味を改めて考えさせられました。再審弁護団の徳田靖之氏は「再審が棄却され続ける中で、模擬ではあるが裁判が開かれたことはとても嬉しい。誤った裁判によって死刑宣告を受け、奪われた命は取り返すことができない」と話

されました。また、菊池恵楓園入所者自治会の志村康氏は「裁判とは人の命に関わることであり、裁く者も裁かれる者も命の上に平等である。決して命の重さに違いがあってはいけない」と語られました。

私たちは平等ということを簡単に口にします。今回の裁判でも、裁判官の役をされた方が「法の下平等」と口にされました。しかし、そもそも人というのは生まれながらにみな平等なはずです。「天下唯我独尊」とあるように、生まれてきた私というこの命は、上も下もなくみな一人一人尊い存在である、とお釈迦様は言っておられます。それをハンセン病であるとか、障がい者であるとか、健常者、女、男と、同じ人であるのに言葉によって分け隔てていく中に、差別の心が生まれてくるのではないでしょう。お互いを認め合い、理解し合い、ともに歩んでいくことこそ「御同朋御同行」の心であると私は思います。

ややもすると差別心によって振り回されていく私たちです。いかに勉強し、学んできても差別する心というのは消えてはくれません。受け売りではありませんが、「どうしたら差別はなくなりますか」と聞かれた方がこのように言われました。「私の中にも差別心はあります。しかし、差別をなくしたいという心の中には差別はないと思います」と。つまり差

### 菊池事件の概要

1951年、現在の熊本県菊池市で起こったダイナマイト事件と殺人事件。かつて村役場の衛生係として勤務していた被害者宅でダイナマイトが爆発したことに端を発する。県衛生課の要請により被害者がF氏を「らい」患者として県に報告した。それにより菊池恵楓園への入所勧告を受けたF氏の逆恨みによる犯行だとされた。その後、被害者が何者かに殺害され、当然、容疑はF氏に向けられた。ハンセン病であるが故の差別・偏見が、公正な裁判をさまたげ、F氏は裁判所構内の通常の法廷に一度も立つことなく、死刑判決が言い渡され、1962年9月、死刑が執行された。



劇映画「新・あつい壁」は、ハンセン病患者であることを理由に法の下平等を踏みにじられた50年以上前の事件を通して、それを許した当時の社会の意識が今日どのように変わったのか、そして何が変わらないのかが描かれています。

別を遠ざけるのではなく、自分も差別してしまう身であると自覚し、つながり続けていくことが願われているのだと思います。

「ハンセン懇」第5連絡会委員 福田了樹

解放運動推進本部ではDVDの貸出しを行っています。各地で上映をすすめてください。(☎075-371-9247)